



GAUDETE

カトリック広島司教区平和の使徒推進本部

2017-2019年度広島教区年間テーマ

チャレンジ 新しい福音宣教 わたしをお使いください
— 教会へのチャレンジ —

社会司牧デスク設置

初めまして。4月より平和の使徒推進本部にて任務にあっています。社会司牧デスクという新しい部署が設置され、その活動にもあたっています。

この二年間、大学院で近現代日韓関係史を研究していましたが、特に日韓カトリック教会の交流に関心をもっていました。今でこそ、司教会議が行われたり、姉妹教区関係を結んで司祭が派遣されたりと交流は盛んになっています。しかし、1970年代から80年代の軍事独裁政権に対する民主化運動において、韓国カトリック教会が市民を支え、そして、日本のカトリックでも、その支援に関わった人々がいたことをご存知の方は、どれくらいいらっしゃるでしょうか。

なぜ教会が、そんな活動に関わるのかと疑問に思われるかたもおられるかもしれません。これは第二バチカン公会議、特に「現代世界憲章」の精神に基づいた行為でした。この憲章は、神の国の実現は人格の尊厳と人権の尊重によることを訴え、そのためには、政治的秩序に対しても倫理的判断を下すことができるといっています。政権批判を厳しくとりしめし、不当な逮捕や拷問も多かった当時の状況の中、教会は思想や言論、集会の自由を求めた市民を擁護しました。報道の自由もない状

態で、国内で実際になにが起きているのか、韓国の人々が知ることも難しい状況でした。教会では真相究明の告発がなされました。それらの文書はひそかに日本に運ばれ、日本から世界に向けて発表されました。世界の世論を高めて、韓国政府に圧力をかけようという動きでした。日本のカトリック教会からも重要な文書が発表されました。当時の日韓の枢機卿・司教たちの間に親交があり、韓国の司教たちからも依頼されたことでした。

「よきサマリア人」のたとえ話をあげるまでもなく、隣国の教会が苦しんでいるときに、知らないふりができるだろうか・・・という、きわめて基本的な心の動きですが、私たちはこの心の動きすら忘れてしまっていることがないかと思うことがあります。

社会司牧というのは、いわゆる「社会活動をする」という意味ではなく、「かかわりを生きる」ことだと思われれます。イエスがかかわり、福音を伝えようとしたのはどのような人々なのか？それは今の社会においては、どういうことに当たるのだろうか？聖書の通読もそれを考えるきっかけになればよいでしょう。また、現代社会において、どのように生きることかを示しているのが、「教会の社会教説」といわれる文書だといえます。教皇フランシスコの言葉にも耳を傾けつつ、味わい、祈り、自分なりのかかわり方を考えてみることで

できるような機会を作っていけたらよいと思っています。よろしく願いいたします。

本年度の新規推進事項「聖書通読・写経」

2018年度広島教区宣教司牧活動テーマは「教会へのチャレンジ」—伝える使命(預言職・宣教)です。私たち広島教区民一人一人は平和の使徒として、キリストの福音を告げ知らせる使命が次のことばであらわされています。「まず、ことばと行いによりキリストのメッセージを世に告げ知らせ、キリストの恵みにあずからせること」(信徒使徒職に関する教令6)にあり、そして、主は「そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい。人々が、あなたの立派な行いを見て、あなたがたの天の父をあがめるようになるためである」(マタイ5・16)とされています。

また、復活の続唱では、「私の希望 キリストは復活し ガリレアに行き待っておられる ともにたたえ告げ知らせよう 主キリストは復活された」と唱われます。

キリストのメッセージを私たちのことばと行いで社会(世)に告げるために、キリストのメッセージ(神のみことば・福音)を知り身につけることが必要です。神のみことばを知るために唯一聖書があります。聖書は「あらゆることばを通して、神ただ一つのことばを語られます。それは唯一のみことばであり、その中でご自分のすべてを説明なさ」(カトリック教会のカテキズム102)っている書物です。そして、私たちが「聖書を読むとき(神のことばを)神に聞く」(教会の祈り総則56、斜体筆者追記)のです。

預言職をおこなう上での基礎づくりとして、本年度より聖書通読、聖書写経活動を新規に推進することとしました。平和の使徒の皆さん、実践してみたいかがですか？

—「教会へのチャレンジ」のヒント—

唯一の教会

「信条」の中でわたしたちは「わたしは……唯一の教会を信じます」と唱えます。すなわち、教会は唯一であり、この教会はそれ自体として一致であると告白します。…(中略)…教会は全世界に散らばっています。にもかかわらず、何千のカトリック共同体は一致しています。なぜこのようなことが生じるのでしょうか。

1 わたしたちは『カトリック教会のカテキズム要約』の中にその簡潔な答えを見いだします。こう書かれています。世界に散らばるカトリック教会は「ただ一つの信仰、ただ一つの秘跡的生活、唯一の使徒継承、共有する一つの希望、そして同じ愛をもっています」(同 161)。これはわたしたちを正しく導いてくれる、明快ですばらしい定義です。信仰と希望と愛と秘跡と奉仕職における一致——これが、教会という唯一の偉大な建物を支え、一つにまとめる支柱です。わたしたちは、どこへ行っても——たとえ地の果ての小さな小教区であっても、唯一の教会を見いだします。わたしたちは住まいと家庭のうちに、兄弟姉妹とともにいます。これは神の偉大なたまものです。教会はすべての人にとって唯一です。教会は、ヨーロッパ人のためのものでも、アフリカ人のためのものでも、アメリカ人のためのものでも、アジア人のためのものでも、オセアニアに住む人々のためのものでもありません。教会はどこにおいても同じです。それは家庭と同じです。家族は遠く離れ、世界中に散らばることもあります。しかし、どんなに遠く離れていても、家族全員を一つに結びつける深いきずなは固くとどまります。…(中略)…皆様、自分に問いかけてください。わたしはカトリック信者として、この一致を感じているのでしょうか。わたしはカトリック信者として、この教会の一致を体験しているのでしょうか。それとも、わたしは小さなグループや自分自身に閉じこもって、教会の一致に関心をもたずにいるのでしょうか。わたしは自分のグループや国や友人のために教会を「私物化」する人々の一人でしょうか。利己主義と信仰の欠如のために「私物化」された教会を目にするのは、本当に悲しむべきことです。多くのキリスト信者が世界中で苦しんでいるのを知るとき、わたしは無関心でいられるのでしょうか。それとも、家族の一人が苦しんで

いるかのように感じるのでしょうか。多くのキリスト信者が迫害され、信仰のためにいのちをもささげていることを考えるとき、それが心を打つでしょうか。それともそれはわたしと無関係なことでしょうか。イエス・キリストのためにいのちをささげる、家族の兄弟姉妹に、わたしは心を開いているのでしょうか。わたしたちは互いに祈り合っているのでしょうか。皆様に一つの質問をしたいと思います。声に出してではなく、心の中で答えてください。皆様のうち、どれだけの人が迫害されているキリスト信者のために祈っているのでしょうか。おのおの心の中で答えてください。わたしは、信仰を告白し、守るために困難のうちにある兄弟姉妹のために祈っているのでしょうか。自分の囲いの外に目を向け、自分が教会であり、唯一の神の家族であることを感じるのには大切です。

2 もう一步進んで、自らに問いかけたいと思います。この一致は傷つけられているのでしょうか。わたしたちがこの一致を傷つけることがあるのでしょうか。残念ながら、わたしたちは、歴史の流れの中で、また今も、自分たちがこの一致をつねに生きてはこなかったのを知っています。時として誤解や争いや緊張や分裂が起こり、それが一致を傷つけます。こうして教会は、望ましい姿をとることも、神の望みである愛を表すこともできなくなります。わたしたちは分裂を大きくしています。わたしたちは、キリスト信者、カトリック信者、正教会の信者、プロテスタントの信者の間に今なお分裂が存在するのを目にするとき、一致を完全に目に見えるものにするのがいかに大変かを感じます。神はわたしたちに一致を与えてくださいますが、わたしたちはしばしばこの一致を実現することに困難を覚えます。わたしたちは交わりを追求し、築かなければなりません。交わりを育て、誤解と分裂を乗り越えなければなりません。そのために、家庭から、現実の教会から、エキュメニカル対話を始めなければなりません。現代世界は一致を必要としています。現代は、すべての人が一致と和解と交わりを必要としている時代です。そして教会は交わりの家です。聖パウロはエフェソのキリスト者に向けています。「そこで、主に結ばれて囚人となっているわたしはあなたがたに勧めます。神から招かれたのですから、その招きにふさわしく歩み、一切高ぶることなく、柔和で、寛容の心をもちなさい。愛をもって互いに忍耐し、平和のきずなで結ばれて、霊による一致を保つように努めなさい」(エフェソ 4・1

—3)。一切高ぶることなく、柔和で、寛容の心もち、愛をもって一致を保つ——これが道です。教会の歩むべき真の道です。わたしはそのことをあらためて感じます。虚栄と高慢に立ち向かって、高ぶることなく、柔和で、寛容の心もち、愛をもって一致を保たなければなりません。パウロは続けています。からだは一つです。感謝の祭儀の中でわたしたちが受けるキリストのからだは一つだからです。霊は一つです。聖霊は教会を導き、たえず新たに造り変えるからです。希望は一つです。希望とは、永遠のいのちです。信仰は一つ、洗礼は一つ、すべてのものの父である神は唯一です(4-6節参照)。わたしたちを一致させるものはなんと豊かなことでしょうか。これこそが真の豊かさです。それはわたしたちを分裂させるのではなく、一致させます。これが教会の豊かさです。今日、おのおの自らに問わなければなりません。わたしは家庭、小教区、共同体の中で一致を深めているのでしょうか。…(中略)…わたしは、高ぶることなく、忍耐と犠牲をもって、交わりを傷つけた傷をいやしているのでしょうか。

3 終わりに、もっと深いところまで歩みを進めます。わたしが問いたいことはこれです。この教会の一致の導き手はだれでしょうか。聖霊です。わたしたちは皆、この聖霊を洗礼と堅信によって与えられました。…(中略)…この一致は、多様性における一致を造り出すかたに由来します。聖霊は一致だからです。聖霊はつねに教会の中に一致を造り出すからです。この一致は、多様な文化、言語、思想の調和です。一致の導き手は聖霊です。だから祈ることが大事なのです。祈りは、交わりと一致を求める人の努力の魂だからです。聖霊に祈ることが大事です。聖霊は教会のうちに一致をもたらすからです。

主に祈りたいと思います。わたしたちが分裂の道具となることなく、ますます一致することができるよう。フランチェスコの美しい祈りがいうとおり、憎しみのあるところに愛を、いさかいのあるところにゆるしを、分裂のあるところに一致をもたらすことができますように。

教皇フランシスコの18回目の一般謁見演説
「唯一の教会」(カトリック中央協議会 訳)